

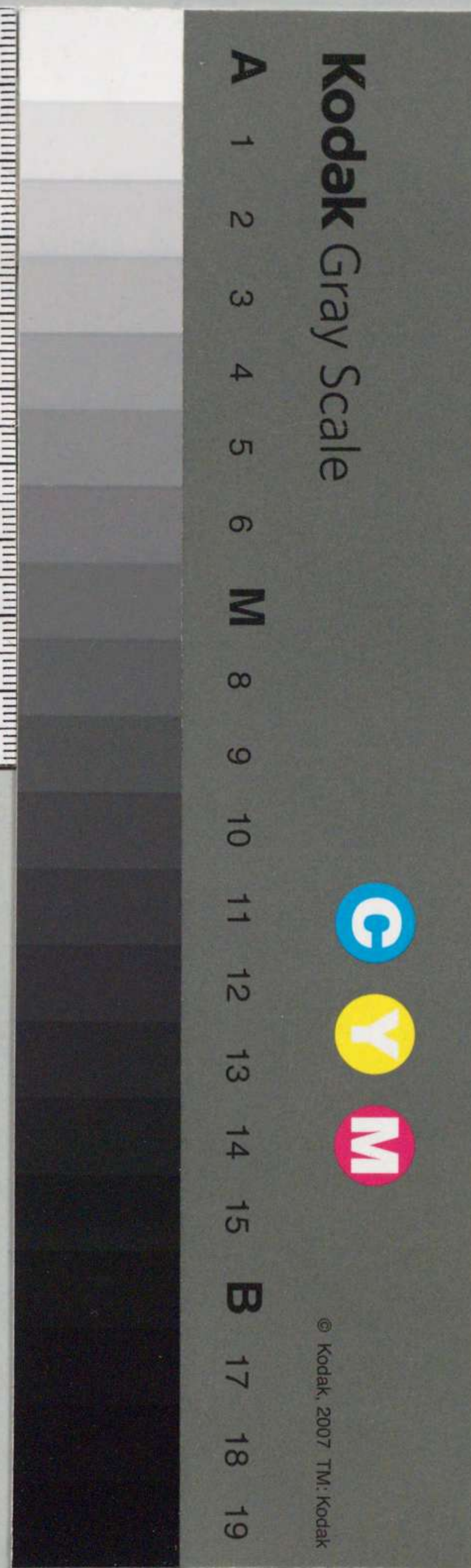
和書類從

三百九十八

和書門類			
四八五	二〇八	五九〇	冊架函號類

和書			
四八五	五九〇	冊架	函號類

内閣文庫		
番號	和	48535
冊數	590 (443)	
函號	261	1



皇朝御製詩經傳

卷之二十一

合賦部地

皇朝御製

詩經傳

卷之二十一

皇朝御製

詩經傳

卷之二十一

皇朝御製

詩經傳

羣書類從卷第三百九十八

檢校保己一集

合戦部卅

難太平記

伊豫守入道了俊今川



思ふはたのき心成ふまゝぬ成るた
とへたり地わききかくも成るおおも思成
あゝさる日あゝ思ふやうに成るふまゝいふ物
そゝあるべきとありふとのれ親祖いふあり
ものいふものゝ思ふもあつとあつとあつと
を知らぬ我れもあゝふり父のよとの事い

範圍

是よりあるありとあつゝ右の昔物語なる
 ころのひしきふかき作き事今と
 つふ言ふとて思ふ我子とも縁を
 更ふ父たるも母ひとあへて昔山名修理
 大夫時氏とて後小松明德の御時といふれ
 陸奥の父ありけれ常より我子縁をこひ
 ち朝歌の成ぬて其謂を我建武以来富洲
 代に清けし人もあるめれえはは僅はる民
 百姓ももつて野の山名といふも
 六波羅のなるもその後知れ又軍に難儀

とも思ひありまされは席代の御前の事とも
 あり世にさしあひも目と弁たるあにといふも
 すれいふもあふあひといふ人ともいふ思ふ
 もく知ぬるも世に成る君に清きとも親の思を
 とあふれとのれとのかやとあふれとの成
 けに死に雅意の事ともある故に御不審とて
 ひらきなりとも息とも聞知るやふな業御歌
 る成は昔人のやうの大にといふも
 るもや實に人文字不通ありとてもの
 ちきりなりといふもはつちのふもあふれ常に

尊氏

直義

道成ももろはふもろ大御所錦小治成はとてせ
 たり也相氏平石成は三郎もあつてせむひりも
 御當は成治成せむひり尾張のへに深川をいふ
 ありーもも皆庶子もあつても細川島山もは
 義包は御下よりいふももや抑義包はけへん
 あつてももろ力人小勝もひり也誠は為親は
 もも義康様様の上より養ひてせむもろつり
 人いふもろひりいふもろは成治成はとてせ
 い成治成はとてせむもろは成治成はとてせ
 むひりもも代も無るにせむひりー我も孫もい

ろもも成治成はとてせむもろは成治成はとてせ
 成治成はとてせむもろは成治成はとてせ
 我七代乃孫に吾生かろて天下成治成はとてせ
 成治成はとてせむもろは成治成はとてせ
 成治成はとてせむもろは成治成はとてせ
 我命とてせむもろ三代の中より天下とてせむもろ
 とて御腹成治成はとてせむもろ也其時乃御自筆の法書
 より細いふもろ也成治成はとてせむもろ
 成治成はとてせむもろは成治成はとてせ
 唯ひふ成治成はとてせむもろと西御所も成治成はとてせ
 也成治成はとてせむもろ也成治成はとてせ

あらう御志より世に主と成るひありとて我も
 先祖に當御所のは先祖は見えかれのより電筆
 院よりされて系圖をいれ目小くけれある人ありき
 御意なきに當る後人よは物語をいれ也ゆり
 天下とてせむのひも後日なむの人誰うは御志に
 下あらぬ人なき一族をいれ殊更とい謙下て可也
 事也家ふよりと身とていれ思ふるるるる
 道とていれかき御代の御助とありと其徳よりて
 可立身と朝夕綿小治成作をいれ事いれ直冬
 恩寺殿宮内太輔よりいれ島山大藏が補重家一ふ

直冬

直冬

宮内が補直氏我もいれ也ゆり
 兼乃ひいれ也

一 我もいれ祖事いれ義氏に御子いれ長氏と総女より吉良
 といれ也其子に満氏いれすいれ玉氏いれすいれ今いれ也
 也貞義と総入道は名有御と家系いれ祖父いれ基氏
 といれ後父兄弟也吉良いれ義右衛門と総入道名有は
 三後父也関は入野木田いれいれいれ玉氏いれすいれ
 也我もいれ祖父の事いれ也也故殿の所為いれいれ也
 ありも也いれ川城いれ基氏と相續たりの関はいれ母方小
 笠原いれいれ方よりいれいれいれ也いれ野葛いれいれ

大和和の人と母方より一方ゆつとほく入部とす
也と川の川より人々も云ふべしこの事也基氏の法
いふもあはれとおひしうと云ふ家重源よりいふ
いふもあはれと川の川より人々も云ふべしこの事也基氏の法
基氏より清養子成りて故後の御為に連枝也仍建武
建武御所より入部ひくは一流と成り伊勢の國より
と云ふれ領あり基氏より妹嫁りてや國なりひくは川
三位と云ふ一父は法師より也一父は卿より入道の父
の山部より也一父は基氏姉嫁りて一父は故後の伯
父より一父は入道より故後のいふもあはれとおひしうと云ふ

一今川店と云ふ馬入道は御時より長氏の少年より御時
装束料よりいふと吉良店惣領より為進退と云ふ
一故も基氏不慮よりいふと一父は故後の代より有記
上総入道合部より父子は惣領より遠祖止より後由
つるは相續也東福寺佛海禪師より後より師也仍
彼塔頭正法院より代寄進也也和尚は我等の先祖
今川一名は不知りせしと云ふも政所よりいふ
高木入道と云ふ一者伯父よりいふと一父よりいふ
一父よりいふと一父は我の七世より父母は菩提より永代寄進
大難然るる子孫の中より名字は地大師より存るものあり

殊更ふく貴とありて河東合戦より死なむとや
その上校中務入道の祖父あり

一 六波羅合戦の時大將を戦うとて一ふそ一方の大指
と利をいふ自ら降参とてれとのと平家記の書たるを
ふむ無念の事也此記の作者は官方源重の老えて
無業肉より押く如し書たるや毫も尾籠にいり
あつた切あつたふとやとていふ平家記の事あやうも
あつたものおほいなるや昔等持参しては勝寺に息孫と人
を記と先三平余巻持参しつゝ錦小治原の御目
よりあつたれと云恵法平家の所せられぬあやう

愚者の語のまゝは作らる是は且つあるやうに記され
らふにあらやうと追々書入又切出とて此事あるを程
不可有命國の由候とて後日中務入道代重とて書候
よりあつたふと云とて多不記とてかせとて人言名記と
あつたやうなるが如く高倉の人にも且つあるやうなる
入たるあり一向略しあるもさやとて御代重記といふに
十三年の事たるを意録取らるゝ但雅意といふを長く
を代りむ者たるを世に此記の御代重とせしむとある也
いふは後徳記のたつたふとてあるもあれもそれなも
かちつたあつたやうとて記す九つたりとやとてい

ちりきるくもいれざる名前の偽をたやうに
まじく錦小路の御新より玄惠法師讀する
そ代の事ものむねこれ徳勝寺と人の見聞ひ
うへにゆび思言さす一六唯とえろ難しよはあつた
九条河原退け時の事所信あり一人お月々平
記日名字の不ふや子孫の爲不便の事ゆばり諸
家乃具恩かきおもてもあるれあれた也といふ
ゆべが事なり一あるうゝ号なる想託て細川の傳
伝一の物もいふぬやうめく私曲なまありそ代乃
人といふそれ角九條河原と流るる可く幾人も

此事もあれは是の書とハならぬハ必ずその子
孫は其面目ある所ハ細川ハ其事と

一其以大河新の東寺に陣也と云皇兵を山門に陣せし
也は方北とて自軍方よりつゝ味方兵糧難儀
して東國山阿波院より南へ河沿西老の山に
長坂にありに連く大砲を陣えりて敵を襲
阿波院の峯に向ふ諸方の山も其の前で戦ひ
て追ひ拂ひし時左のうらよと射られしこと二
三日ほど四方河系幾度か向たり重て故道へ向
けしころ数回射られ袖とさきよく向れりには是

よ仁本右馬助義長今の右京太夫也三井寺にありて
地藏より殿向なり義長云々日ハあけとつて
我よりと云ふれ敵方論と云事と云事自ある
合我仁本半退り相坂なり伊勢方といふと大
力者只一騎なりなりと云ふと前のたつひの隙を
とて是と知れり敵方の隙ありと云ひてと云ふ
義長入道なり甲のさなりと切落しれど落馬也と云
ひくその花氏の世にたつた大仏と云拂切り
なりと云時なり馬と云事と云事太刀と云事
あいそ甲なりと云事と云事馬のひと云事と云事

太刀より拂く小左は菟手二の板と切り前
 る敵の中に分金とて時分敵の面より退後
 小左殿が敵の敵村平下ものとき着あいたる音え
 い甲は敵とて内よりとてわけてまゐる今川殿より
 あり敵と持ひひくは方より被りしをめしたる
 甲とてはぬきとてさきよりひくも巻切て頭より
 底より切りたぬきとてさきよりひくも退りて
 りきとてはぬきとてさきよりひくも退りて
 二の重ぬきとてはぬきとてさきよりひくも退りて
 総列とてさきよりひくも退りて

一建武二年日駿河国手越河原に戦ひ御方お負
 り錦小左殿は討死とてさきより城細川は房部
 有則とてさきより先づ前より討死は
 一と唯一騎大勢の中に逃りしをさきより
 くり乃とて川名見那三郎入道は時討死は左
 入道殿よりさきより退りしをさきより退
 りし味方とてさきより後日れは合戦の目お
 しゆりしは馬は幾押返りしは御馬廻りの
 一同は馬は尻とてさきよりひくも退りて
 左殿とてさきよりひくも退りて

今御所より奥津の宿より進出されたるを
後九引御退の時兵庫奥所堂より布より三引
膳切の着到付られし細川公房の舟より
下りしより入道友は是より膳切の舟に
と進出されし事と後日錦小治屋の常には
物語よりいふ二度いふより如せむと
や一定とあるれ異見よりありせありき
武者れ心は同一とと思ふべしひえはふ
不審也と作す也いふ事か六條より無隈回
記より入道存事也若し御所よりとて

者也

一式部大補入道存事

号三郎 頼國

中先代合戦の時御所

大將より自京都下向遠江國さやの中より先
代の大将名越より者と討取相撲必湯より御所
のとき要害と稱するより山より打より式
部入道友は多力斗より落され多敵の太鼓の中
馳入れし追破られしといひ難事と云ふ馬
の面より進出されし二名よりさうし地急を前
より落されし二名より落られし松風より馬
は最良の馬よりひかり馬より尾よりひさしの皮

八郎米倉八郎方衛つゝ元又二番更なる市おも
 恙者なりとの圍にさるるを當り人れ中
 ものゝ一番勢のきつて城をへてとてあまた橋枕
 井ものゝ赤坂台にめ半山とて池とてを
 所方の越れ馳せりといふに一處よりなるを
 ある馬に乗たる武者切落され次ぐの武者皆
 切落されて藤よりあるひる時味方とみきれ一處
 勢合戦始まるは桃井や津主殿もあつて負つて
 赤坂宿の南とての所けり退るゝ入道屋へ移れ
 て款山とてけるもの以下おとるひて西なるを

ていふはけ武者二騎と左衛門尉のひや
 桶部より留くおぬ川の堤とて非人乃家あり
 りふあり井のひるを扱ふとて敵重て
 かゝぬ時思田血イの味方より人一人とて人々なるを
 是より明日所方城可待とて信され八郎
 左衛門も負かるといふとてめいれおこし
 上大将とて焼くといふとて火とてけり力
 ろくべあるとて思田血イは被加乗る桃井より
 戦のかりとていふとて身成金とてなる
 といふは款よりなるといふとて退て亦味方にて

てうらふに敵も退也物あひあひ勝利なりと云ふ
と云ふ事と後小左衛門作一の地井に逢ふ人
敵は美濃も負軍せむと人あふ人天命を
お授ふに実ふよめて逃る事不可と云ふゆひ
て力あつて自れを時退る也と云ふゆひ也さて土崎
や一の里地の京都より切ぬさうと文海通所方
にも合一の奥勢も重野系に軍の後伊勢所より
きて京良天王寺乃合戦のさう也京勢伊勢雲
河馳合て戦ふと云ふ所方お負へるさうと云ふ系
に軍土崎頼遠一人さうと云ふ也自れも負る

や是も太平記の書うさうもね入道なるも
いづれと云ふと云ふゆひ一の里のさうと云ふ
也但作者も尋間又我ふも不逢るさうも也
信代もはさうと云ふ名知の人さうと云ふ
らうても可き事なり

一駿河國無數十ヶ所の不領は後詰の時乃恩
賞さうと云ふ入部さうと云ふ時我ふも年の初め
して富士海間さうと云ふ時我ふも遠く
らうと云ふ番氏さうと云ふは赤坂の軍の時我
ふもさうと云ふさうと云ふ入部さうと云ふ退て何

うにかたきくはるし讀ひて其めい秋も遠方な
まゝと云飛騰めしとせむひくは夢川の中
まゝと云くくに清氏君使國は落るとして重く
飛御下さくと署のめしと云御用めのされはもと
に讀ひひく言諸道行れ事あるをよび事をと成電
り清々ひくある不清氏野んれ事ハ無実くする智能
やと云くあふ越列直世代清氏内くよりひくると依拂
畏海くくさるとするめ貞世在京ありたりとも可来
物とも清氏示而け信秋よりくると思ひて思ひおの
やめくゆるとうや是は酒か座の道忠となてふくふ

子著と八幡八島と号する事一小神原小形と
納まりに可執天下文をもちて從社家の方へ進む
あると云ふは歟又漢氏の非業の判形も不審也
とてそ處に諸のいへて我事東寺合戦の時漢
氏多に同道由あつたりとて一所より度合
哉とては別て可なりとの由なりとるに難
乃後遠に國益系在候松尾等其時國不あり
たりとて終に清氏より依無意遠
別は在國せし間此時は在東せしき所清氏と
非の候と思ふ留あるべき事とて終に清氏

うん今録倉庫も思ふ立しき是後人毎らうみ
やうとふたふたも御運もはく御威勢いありく
わうとせの宗師ては道はあつてもわうとせの
く誰のく録倉庫もふとせやたつたるふ
その内怖畏ふとせやたつたる御祈禱をさけ
く関東所調伏ふとせや国々事も多うく氏何の
御でうやうも清祈もうらたせをひて天に
て下もる道とせや成も賞ふとせやれん小強ふ
天道も佛神のふとせや立所もけいせのふとせや思
ふとせやふとせや合戦ふとふたふとせや天

地人たふたにありて思ふたに天乃利とせや其のふ月
日時吉方其のふとせや性ふとせやふとせや
ぬふとせや月て天乃利とせやふとせや地乃利とせや
或ふとせや富貴ふとせや大海難ふとせや富貴
ふとせや城ふとせやふとせや地乃利とせや人の利とせや
理ふとせや人たふとせや同ふとせや理ふとせや天
地乃利とせや富貴ふとせやふとせやふとせや
ふとせや同ふとせやふとせや御運もはく御威勢いあり
く関東所調伏ふとせや国々事も多うく氏何の
御でうやうも清祈もうらたせをひて天に
て下もる道とせや成も賞ふとせやれん小強ふ
天道も佛神のふとせや立所もけいせのふとせや思
ふとせやふとせや合戦ふとふたふとせや天

兩河所不思ひくも、
 大休寺成、路道移わくも、
 所より矢乃、
 是より、
 大河所、
 大休寺、
 とも、
 當、
 院、

との御方便に候列井全れ合戦乃的も師直
 師素よりこれとも大所新いともありて世治るる
 きい又由比山此合戦後上杉民部大輔自伊豆より
 方て落ししもの大所新とありてせりて又所
 合新いども定つともありき就支南洲新いどもは
 詮合ともありきや東の坊つ及みありきせりもの所あ
 りともありきなりき一悉く終に天下ともあるたせり
 うらうへーきもひかり御政道ありき事ありき
 も關東太公不一同せば目なむ此守護ありて然ハ
 もろの所見ありし御中よりありきと云ふこと

しは我亦不居はるゝに猶録書及と勅す
と也京都にも思ふと移と存するもや遠る
乃平に就是非園東地所より之を也所和賸
の上は京都とて園東とて人の方出英知り
地お遠るゝにふゝとて思ふとては隠る
いつともあるゝる如くゝを思ふとての
重くゝと移りしるもゝ隔金とてと園東
のめ所より者我亦不居はるゝに猶録書及と勅す
乃平に就是非園東地所より之を也所和賸
の上は京都とて園東とて人の方出英知り
地お遠るゝにふゝとて思ふとては隠る
いつともあるゝる如くゝを思ふとての
重くゝと移りしるもゝ隔金とてと園東

不便の事となせしと我亦不居はるゝに猶録書及と勅す
乃平に就是非園東地所より之を也所和賸
の上は京都とて園東とて人の方出英知り
地お遠るゝにふゝとて思ふとては隠る
いつともあるゝる如くゝを思ふとての
重くゝと移りしるもゝ隔金とてと園東
のめ所より者我亦不居はるゝに猶録書及と勅す
乃平に就是非園東地所より之を也所和賸
の上は京都とて園東とて人の方出英知り
地お遠るゝにふゝとて思ふとては隠る
いつともあるゝる如くゝを思ふとての
重くゝと移りしるもゝ隔金とてと園東

只任志行て衆向して親類家人數百人をて
治る事面目を領する人なる事家人亦いたく
あしぬ事也人々を乃位したる忠といふ事
あまの事なりやと忠功なる事かろく眼のて
出来うとおもふ事也

一大内義弘入道之弟大友常國に歸ひて來て云
大友之事始中終に所扶持一跡ともあれぬ事
新恩をものひし事を難義及しぬ事度は者依
上意難儀系治の所一度の事方あれなり
て今下向の事をき恨危難不義に仁也難然

度此事いふ所の所芳君成重られて此對面より下
さる一いふ事兵庫乃津に逗留し終日此位なり此報
賄めく向後亦可致忠節と云ふ事後言ふ事
うれ事なりして不快と云ふ事これ今度の方
此ころあふより系治事ハ古江右馬頭と云ふ
あふ上治の事とも云ふ我く是身成の爲指
南と云ふ事係治の時方て治事なりと云ふ
一と云ふ治事をこの忠と云ふ事我ハ系治の時直日
所尋る事何事に大なるれ事と云ふ款仁と云ふ
事ハ事を作しと所尋る事更ハ難に治之由なり

仍犬友系法も終日高信を而も然れども
 まく、一々もうれ、事思ふぬ、達上國たる事な
 ー但に悔え非て、不対面之由、は我お、い、い、
 へ、次個を我、下向の事急、下下向と、敵信脱
 迎目也、就、大友、事、系、敵、作、事、お、い、い、
 弟、て、対面の事、急、上意と、い、い、
 此事、弟、方、は、全、男、対面、可、い、い、
 意、い、い、大肉、い、い、
 へ、い、起、請、み、と、両、度、依、作、以、自、筆、書、を、記、只
 了、後、う、為、業、起、肉、く、所、急、可、然、と、い、い、
 了、後、上、意、に、背、へ、さ、あり、と、い、い、
 大肉、い、い、所、所、の、は、い、乃、極、見、及、り、い、い、
 き、と、い、い、羅、が、い、い、
 目、は、い、い、の、陰、背、と、い、い、
 人の、初、也、い、い、
 め、い、い、の、は、自、方、弱、事、あり、い、い、
 出、来、う、い、い、
 い、い、い、い、
 貴、方、も、い、い、
 も、煩、い、い、

了、後、上、意、に、背、へ、さ、あり、と、い、い、
 大肉、い、い、所、所、の、は、い、乃、極、見、及、り、い、い、
 き、と、い、い、羅、が、い、い、
 目、は、い、い、の、陰、背、と、い、い、
 人の、初、也、い、い、
 め、い、い、の、は、自、方、弱、事、あり、い、い、
 出、来、う、い、い、
 い、い、い、い、
 貴、方、も、い、い、
 も、煩、い、い、

ありしころ西の輩は我より倭事私曲を以て
 我よりしるも未だ治くし所所尋ねるは中
 九段乃事可あはれとなせしと終ふ頃所尋
 て永く九段の人より我より私曲を言ひしとあ
 るるや個實よりくよ事あれはなむや所成
 賜りしむめは誰のくおもひしむたるへし
 今同和泉は池よりて現取の所は九段は此乃
 我より治くしは是内事くは方々落合へき
 恥あるもくは治くし誰の義及くしる也能く
 おもひたるはなむめは誰の義及くしる也能く

あらざるもくはくひて不道不義我れとゆふはく
 可然親ふ不孝れはくはく不義はくはく不忠不
 孝乃我くはく道尾龍の軍町人土民のくはく
 へは人乃親と尚く世いにくも同事も是く我
 孫も相接ししはくはく志あてて書き也不倭世
 には父兄あるはくはく事也あはくはく
 ふよ孫よとのれさうくはくはく親のあらは
 けやあはくはく

應永九策二日

于時七十八策

徳義

一 録倉の瑞泉寺成 基氏 所名兼斗我ホウ祖父の
 名兼也此其一家親類ホ乃申小吾徳の人の名
 兼をたててある事兼乃其事とやアあり
 うくをうんとな也新田方の人くは名兼も
 此方より先祖をたて名兼とていふも一も兼
 入道よりいふ義也此は兼なるの事れ一もいふ
 ア一この事九年九列より我とありこの事貞長
 と名の事一もや不孝の事也今年中とて
 此邦より中風氣なる所へおまふ叶思卯の言に
 兼はうあるも一もいふ事れ流流比奥也兼

傾字をば又老ゆれの所行あるとていふも
 ひと

一 世人のうあるは後九列より事人二人は
 たふまゝ落とて大内入道探題れ大をたて
 又八混川をたて探題ためは勘解由小治方便
 大款難哉はう後骨成り静澄乃時になりて
 吾切難者よりある利はとてけも何中國
 事と思ふ混川事一様くある一も是事
 そり一可閑は

右雜太事記以願各負如本比較了